

聖書:第一列王記11章14~25節

説教:憎しみの渦巻く地で

はじめに

ソロモンが七年の歳月をかけて神殿を完成させたのをきっかけにして、イスラエルの経済はどんどん成長し、国は豊かになっていき、今で言えば先進国の仲間入りをするようになります。世界中のイスラエルを見る目が変わってきます。周りの国々は、イスラエルを敵に回してはいけない、同盟関係を築き、平和協定を結ばなければと考える。それでどうするかというと、王さまたちが自分の娘をソロモンの妻にしてくれと言って差し出してくる。それでとうとうソロモンの妻は七百人、側女は三百人という数に上っていきました。目を丸くするような数ですが、神が問題にしたのはそこではない。この女性たちが元々信じていた神々をソロモンが拝んで罪を犯していくようになる。そのことが後々大きな問題を引き起こしていきます。そのことが今日の所に書いてあります。

1 主の約束と警告を知りながら

1) 恵みの約束

ソロモンは、血筋から言えばダビデ家という名門の生まれで大富豪、知能は抜群、賞賛の声はちまたにあふれています。人間がこの世で望むことのすべてを手にしていたと言ってよいでしょう。それだけでもすごいことですが、加えて彼は二度にわたって神の声を直接聞く特権も与えられました。彼が王座に就いたばかりの時が最初で、二度目は神殿と王宮が完成した時です。神はどんなことを語ったのか。9章4, 5節。「もしあなたが、あなたの父ダビデが歩んだように、全き心と正直さをもってわたしの前に歩み、わたしがあなたに命じたことすべてをそのまま実行し、わたしの掟と定めを守るなら、わたしが、あなたの父ダビデに『あなたには、イスラエルの王座から人が断たれることはない』と約束したとおり、あなたの王国の王座をイスラエルの上にとこしえに立たせよう。」

ひとこと言えば、主の命令を守るならイスラエルは永遠に続く。そのような内容でした。

2) 警告

しかし主のことばはそこで終わりません。続く6, 7節前半です。「もし、あなたがたとあなたがたの子孫が、わたしに背を向けて離れ、あなたがたの前に置いたわたしの命令とわたしの掟を守らずに、

行ってほかの神々に仕え、それを拝むなら、わたしは彼らに与えた地の面からイスラエルを断ち切る。」

もし主の命令を守らず他の神々を拝むようなことをするなら、イスラエルはやがて滅びることになる。ソロモンはこのことばを聞いてイスラエルを治めていった。知性に優れた人ですから当然、何が正しくて何が間違いなのかきちんと判断しただろうと思うのですが、そうはいかなかった。

3) ソロモン

ソロモンは年齢を重ねるに従って、若いときに持っていたまっすぐな信仰からそれていきます。具体的には、妻や側女たちが信じていた他の神々の影響をだんだん受けるようになり、イスラエルの神ではない他の神々を拝むようになった。いやいやながら拝んだというわけではありません。妻から、「神社を建てたいからお金を出してね」と言われると、「はいはい」と喜んでお金を出して神社を建ててあげる。「こんど開かれる神社の大切なお祭りがでいけにえを奉納したいからお金を出してね」とせがまれると、喜んで出してあげた。ソロモンも美人の女性のおねだりにはデレデレとしてしまう普通のおじさんだったのか。いろいろ考えさせられます。いずれにしても神は二度にわたってソロモンに警告していました。警告を聞いておきながら従わなかったわけですから、当然その責任を問われることになるわけです。

皆さんは考えたことはなかったでしょうか。「神の御声ははっきりと聞こえたら、何も悩まなくてすっきりするのに。どうして私には聞こえないのか。信仰が弱いせいだろうか。」私は主の御声は聞こえません。たぶん信仰が弱いためなのでしょう。でも、私は聞こえなくてよかったと感謝しています。というのは、ソロモンは神の御声を聞いたためにずっと死ぬまで責任を問われ続けたのです。守ればよいけれど、守らないと分かる厳しい罰を与えられていく。神の御声を聞いた以上、知りません、忘れませんでしたは通じない。神の御声を聞くというのは、大変な責任を負うことになる。だから聞こえなくてよかったと思うわけです。

2 ソロモンに敵対する者たち

1) ハダド

ソロモンは、自ら進んで他の神々を拜んでしまっています。神の御声を聞いてしまいましたから、言い逃れできない。その結果なにが起きたのか。神はソロモンに敵対する者として三人を起こします。今日は二人の人物を見ます。一人目。14節。「こうして主は、ソロモンに敵対する者としてエドム人ハダドを起こされた。」

この後のところにハダドの生い立ちのことが詳しく書かれています。話は、ダビデがまだ健在だった頃にさかのぼります。ダビデの部下であった將軍ヨアブが、エドムの男子をみな断ち滅ぼそうとしたことがあった。そのとき、ハダドはまだ少年だった。なんとか戦争から逃れてエジプトに亡命していく。すると思いがけなくエジプトの王ファラオに気に入られて、養子にまでなってしまう。亡命した者がこんな出世コースを歩むのは普通ありえない。非常に恵まれた環境です。エジプトにいれば何不自由なく過ごすことが出来た。ところが彼は大人になってから、ダビデが眠りました、ヨアブも死にましたというニュースを聞くことになる。するとハダドは王の所に行って、「国に帰らせてください」と願い出る。王は説得を試みますが、決心は変わらない。イスラエルに戻っていきました。

あれだけ恵まれた所にいたのに、なぜわざわざ戻るのか。やはり、自分の家族がダビデに殺されたという憎しみがあるからではないですか。自分を苦しめたダビデ家になんとしても復讐したい。彼が何をしたのは、具体的には書かれていませんが、25節に「悪を行った」とあるので、イスラエルの南の地域に住みながら、おそらくソロモンを悩ますようなことをしていたのだろうと推測されます。

2) レゾン

二人目は23節にあります。「神はまた、ソロモンに敵対する者として、エリヤダの子レズンを起こされた。彼は、自分の主人、ツォバの王ハダドエゼルのもともとから逃亡した者であった。」

このことも少し説明が必要です。これもダビデの時代のことですが、ツォバの王ハダドエゼルが、ダビデに向かって軍隊を差し向けてきたことがありました。その中にレズンが兵士として参加していた。ダビデはこれを迎え撃つわけですが、ハダドエゼル軍が負けてしまう。レズンは敗残兵とし戦場からなんとか逃げ延びて、ダマスコに向かう。そこで力をつけてアラム地方を支配する者となります。ですから、このレズンもダビデに強い憎しみを持っている。彼が支配したアラム地方は大雑把

に言えばイスラエルの北にある。先ほどのハダドはイスラエルの南ですから、神は、イスラエルの南と北に、ダビデ家を憎む者たちを置いてソロモンを苦しめ、のちにイスラエルが分裂していくきっかけをつくっていきます。

3 神

1) なぜ

毎日私たちはいろいろな事件を耳にします。いじめが起きています。人が人を傷つけています。ありもしないうわさを立てて中傷しています。ときには、いのちを奪うことさえします。その多くは人が人を赦すことが出来ない、憎しみから起きていると言ってもいいくらいです。多く人は、人の心から憎しみさえなくなれば、世の中もずいぶん良くなるにちがいないと考えます。けれども、現実はずっと逆の方へと向かい、ひどいことが次々と起きていきます。

今日の所に登場するハダドもレズンもともに、心に憎しみをいだいている人たちです。不思議なのは、聖書にこう書かれていることです。「こうして主は、ソロモンに敵対する者としてエドム人ハダドを起こされた。」「神はまた、ソロモンに敵対する者として、エリヤダの子レズンを起こされた。」神は人の憎しみを利用して、ソロモンを罰し、イスラエルを滅ぼそうとしている。そのように読めます。人を憎む思い、人を赦せないという思い、それは全部罪ではないのか。その罪をどうして神は利用するのか。なんだか納得できません。

2) 憎しみの真ん中に立つ主の十字架

イエス・キリストはどうなのでしょう。この方は、罪ある者を赦し、永遠のいのちを与えるという神のご計画を成し遂げるために私たちのところへ来てくださいました。では、この神のご計画はどのようにして実行されたのでしょうか。汚いものは使いません。使えませんと言って、きよいものを用いたのか。

イエスを十字架につけたのは誰か。直接にはパリサイ人律法学者たち、祭司長たちですが、それだけではない。群衆は叫びました。「イエスを十字架につけろ。」これを聞いてポンテオピラトが恐れを覚えるほどの激しい叫び声でした。なぜ叫んだのでしょうか。人々は、イエスが登場した最初の頃は思っていたのです。このイエスこそ、自分たちを救ってくれる救い主に違いない。そのようにして望みをかけた。イエスが数日前にエルサレムに入場されたときは、「イスラエルの王、ばんざい」

と叫びながら喜んで迎えた。ところがこの男は、あれよあれよという間にあわれな姿になり果て鞭で打たれている。結局イエスはペテン師だったのだ。自分たちをだましていたのだ。こんな男に望みをかけた自分が馬鹿だった。そういう憎しみをイエスにぶつけていった。こうして考えてみると、主の十字架というのは、まさに人の心の内にある憎しみのど真ん中で成し遂げられていったことに気がつくのです。

3) 救いの道

ソロモンは、神からの二度にわたる警告を受けながらも、主の掟を守り通すことに失敗しました。いったいどうしたらよいのでしょうか。石にかじりついてでも守れというのか。だったら誰一人守れる者はいません。神は誰も出来ないことを命令する方なのでしょうか。

そんなはずはない。実は、ソロモン自身が自分の口でその解決方法を語っていました。「人々がもし罪を犯しても、あなたに立ち返ってこの宮に向かって祈るなら、民を赦してかれらをあわれんでください。」

「私は主の掟を守ることができませんでした」と悲しみながら主に立ち返り祈るなら、主は赦して下さる。

十字架は、人の憎しみの真ん中に立っていました。そこはまた同時に、私は人を赦すことができない憎しみを抱えている罪人ですと告白し、主に立ち返る場所でもある。そのようにして私たちが立ち戻る場所を備えてくださっていた神の御名をあがめたいと願います。